

記録
16ミリ
カラー／54分
日・英語版

■自主企画

スタッフ

- 製作
利光久輝
- 企画・構成
村山英治
- 編集
沼崎梅子
- 音楽
杉田一夫
- 解説
幸田弘子

文部省選定
1990年キネマ旬報文化映画ベスト・テン第3位

〔協力〕
(財)家族計画国際協力財団

現在の私たちの生活は物質的には豊かになったが、何か大事なものを置き忘れているのではないか。この映画は、発展途上の南の国々を訪ねて、まだ貧しいけれども子供たちの幸せと健康を願い懸命に働く中から目覚め、自立をめざす母たちの姿を描いて女性の力の開発を訴える。



私たちには近くて遠い国々、それぞれに民族も文化も異なる大地に生きる母たちを訪ねてみた。

はじめに訪れたのは、インドネシアのジャワ島中部の農村。村の朝市で、40歳で9人の子持ちだという母に出会う。その家庭を訪ねてみた。

子供たちも皆両親を助けてよく働いている。貧しくて働かなければならない母たちの悩みは、休む間もなく子供ができてしまうことだ。こうして序章は核心に入り、最後に和気あいあいたる場面、村で初めての女たちだけの賑やかな集いになる。

この穏やかな序章から、第2章、第3章と烈しい展開になる。富める北から近代産業が押し寄せている南の国々では、都市のスラム

は年々ふくれ上がり、その数は1000以上にものぼるといわれる。

そんなスラムの生活から立ち上がって、たくましく生きるフィリピンの母たちの中から、補助医としての教育をうけて、村に帰ってきた村人の医療に献身する1人の助産婦の感動的な姿を描く。

ついでアジアで最も貧しい国、バングラデシュの農村。結婚に破れ、子連れで実家に帰された女性の姿を追う。彼女は、が幸い近くにあった民間の医療施設に付属する小さな職業訓練所で、自分の手でモノを作る喜びと、これが暮らしを支える力になることを知り、同じような困難な境遇にある貧しい村の女たちを説得して、厳しい男女差別と闘って村に女たちの仕事場をつくる。

そして終章は、メキシコの無医村で13人の陽気な母たちが家族の健康を守ろうと、ボランティアの医学生を迎える小さな診療所を自力で築きあげる過程を描いた明るい物語で幕を閉じる。

どこの国を訪ねても母たちの心はみな同じだ。子供たちを丈夫に育てたいと願い、少しでも暮らしを楽しみたいと一生懸命働いている。大切なのは、こうした自助努力を辛抱強く支えることだ。

